否定の意志を表す「～まいとする」について

加藤 恵梨（名古屋大学）

On the Negative Volitional Expression "maitosuru”

Eri Kato (Nagoya University)

要旨

否定の意志を表す「～まいとする」がどのような表現と共起するのかを『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の検索アプリケーション「中納言」を用いて調査し、日本語学習者が「～まいとする」を用いて文を作ったり、日本語教師が学習者に「～まいとする」の例文を提示したりする際のヒントとなるような記述を目指した。その結果、Ⅱ型（一段）動詞が「～まいとする」に前接する場合、「語幹＋まいとする」がよく用いられ、「非過去形＋まいとする」はあまり用いられないこと、不規則変化動詞「する」が「～まいとする」に前接する場合、「すまいとする」という形がよく用いられることが分かった。また、「～まいとする」に後接する表現は「～まいとして V」が最も多く、「好ましくない事態が生じないように努力をする」という意味を表すことが多い。さらに、「～まいとする」は数は少ないが、ブログや知恵袋などでも用いられることなどを明らかにした。

１．はじめに

「～まい」には次の例(1)のように話し手の否定の意志を表す用法と、例(2)のように否定の推量を表す用法がある。

(1) あんな店には二度と行くまい。
(2) この苦しみはほかの人にはわかるまい。

（市川（2007: 219）の(1)と(2)　下線は引用者）

本稿では、話し手の否定の意志を表す「～まい」が、「～まいとする」という形で用いられる場合について考察する。「～まいとする」の例には次の例(3)～(5)のようなものがある。

(3) 銃を奪われまいとして争いになった。
(4) 夏子は泣くまいとして歯を食いしばった。
(5) 家族の者を心配させまいとする気持ちから、会社をやめたことはいわずにおいた。

（グループ・ジャマシイ（1998: 533-534）の(1)から(3)　下線は引用者）

「～まいとする」は動詞が前接し、「～ないでおこうとする」という意味を表すことが指摘されている（グループ・ジャマシイ（1998: 534））。「～まい」は話し手の否定の意志を表すが、「～まいとする」は第三者の否定の意志を表すこともできる。

以下では、「～まいとする」にどのような動詞が前接するのか、またどのような表現が後接するのか、どのような分野で用いられるのかについて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ と略す）の検索アプリケーション「中納言」（短単位、可変長データ）を用いて調査する。調査をもとに、日本語学習者が「～まいとする」を用いて文を

作ったり、日本語教師が学習者に例文を提示したりする際のヒントとなるような記述を目指す。

２.「～まい」に前接する表現についての先行研究の記述

「～まい」は活用のタイプによって接続の種類が異なり、一部の動詞ではゆれがあることが先行研究で指摘されている。

Ⅰ型（五段）動詞には非過去形に接続し、Ⅱ型（一段）動詞には非過去形か、語幹に接続する。

・あいつには今後一切連絡をとるまい。　（Ⅰ型動詞）

・そんな番組、絶対｛見るまい／見まい｝。　（Ⅱ型動詞）

不規則変化動詞「来る」には、非過去形のほか、「来（こ）」「来（く）」にも接続する。

・私は二度とここには｛来るまい／来（こ）まい／来（く）まい｝。

不規則変化動詞「する」には、非過去形のほか、「す」「し」にも接続する。

・こんないたずらはもう｛するまい／すまい／しまい｝と固く決心した。

（日本語記述文法研究会（2003: 60-61））

上の記述にあるように、「～まい」がⅡ型（一段）動詞に付く場合は二通りの言い方が可能であり、不規則変化動詞「来る」と「する」に付く場合は三通りの言い方が可能である。確かに、Ⅱ型（一段）動詞と不規則変化動詞「来る」と「する」に付く場合には複数の言い方が可能であるが、使用頻度の点から見ると、「するまい」「すまい」「しまい」が同じ頻度で用いられているとは考えにくい。よって、どの表現が良く使われているのかについて調査する必要がある。

次節では、「～まいとする」においても、Ⅱ型（一段）動詞と不規則変化動詞「来る」と「する」に付く場合、複数の言い方が用いられているのかについて調査する。

３．調査

3.1 「～まいとする」に前接する表現について

まず、「中納言」で「～まいとする」に前接する動詞の「書字形出現形」を調べると、次の表１のような結果が得られた。

表１「～まいとする」に前接する頻度の高い表現（総数 214）

順位	共起する表現	出現数	順位	共起する表現	出現数
1	考え	17	7	す	6
1	見せ	17	7	傷つけ	6
3	出す	14	9	泣く	5
4	負け	13	9	見逃す	5
5	かけ	8	9	与え	5
6	失う	7			

１位の「考える」と「見せる」、４位の「負ける」、５位の「かける」[1]、７位の「傷つ

[1] 「かける」は「心配をかける」が５例、「迷惑をかける」が３例であった。

ける」、9位の「与える」はⅡ型（一段）動詞である。これらの動詞は表1のように、BCCWJでは「語幹＋まいとする」という形が用いられており、「非過去形＋まいとする」という形は用いられていなかった。次の例(6)と(7)は最も出現頻度が高い「考える」と「見せる」の例である。

(6) （前略）むろん、せっかく気持よく酔っているときに、そこまで問い詰めることはない、という人もいるかもしれない。だがそれは一見夢見がちなロマンチストの意見で、その実、なんの答えにもなっていない。いい替えると、もともと確たる答えをもっていないから、その先のことには目をつぶって考えまいとする。
（渡辺淳一『失楽園』）

(7) 「あのとおり気丈なやつだから、弱みは見せまいとするだろ。そのじつ、俺の世話を焼くことでかろうじて自分を立たせてる、それもわかってた。本当は俺なんかよりあいつのほうがよっぽどきついってこともな。（後略）」
（村山由佳『天使の梯子』）

表1に挙げた動詞に限らず、BCCWJではⅡ型（一段）動詞は、「語幹＋まいとする」の形が用いられていることから、「非過去形＋まいとする」の形はあまり用いられていないと推測できる。しかし、「見る」は例外的で、「見るまいとする」という「非過去形＋まいとする」が3例あり、「見まいとする」という「語幹＋まいとする」は1例のみであった。

また、7位の不規則変化動詞「する」は、大部分が次の例(8)のように「すまいとする」という形で用いられている。その他は、例(9)に示したように「しまいとする」という例が1例あっただけで、「するまいとする」という形は用いられていない。

(8) フィナーレのロンド・アレグレットも、チェロのソロで開始する。これまでにないチェロの起用であるが、技法を複雑にすまいとする配慮のなかで精緻にアンサンブルさせているのは、さすが年季の入った室内楽作曲家の手になるものだ。
（高橋英郎『モーツァルト366日』）

(9) （前略）現在の段階では、これらは第三国を刺戟しまいとする政策的考慮から出た自制行為であって、必ずしも戦争の名を避けて武力行使を行う国家が交戦国としての中立法上の権利を一切行使しえないという原則が確立されているわけではない。
（山手治之『国際法概説』）

さらに、今回の調査では、「～まいとする」に不規則変化動詞「来る」が前接する例は見られなかった。

以上から、Ⅱ型（一段）動詞が「～まいとする」に前接する場合、「語幹＋まいとする」の形がよく用いられ、不規則変化動詞「する」が「～まいとする」に前接する場合は、「すまいとする」という形がよく用いられると言うことができる。

3.2 「～まいとする」に後接する表現について

次に「～まいとする」に後接する表現について見る。「～まいとする」に後接する表現を調べると、次の表2のような結果が得られた。

表 2「～まいとする」に後接する頻度の高い表現

順位	後接する表現	出現数
1	～まいとしてＶ	42
2	～まいとするＮ	37
3	～まいとした。	24
4	～まいとしている。	13
5	～まいとしていた。	8
6	～まいとする。	5

最も多いのは、次の例(10)から(13)のような「～まいとして V」という形である。

(10) 〈やっぱりこいつは、鉄人２８号じゃ。球のスピードと切れが、わしとは、全然ちがう〉
　咲本は、最初は、負けまいとして懸命に投げていた。が、そのうち、無理して投げるので肩が痛くなってくる。　（大下英治『小説明治大学』）

(11) 折角ありついた地位を失うまいとして無暗に勉強したのである。
（佐々木邦『ガラマサどん』）

(12) （前略）だが、もし、地元の警察が、この日記を読んでいたら、きっと、石崎を、真っ先に疑ったろうと、思った。石崎が、堀江正彦を失うまいとして、由美を殺したのではないかと、警察は、考えたろうからである。
（西村京太郎『十津川警部の挑戦』）

(13) 目の縁から大粒の涙がいくつもこぼれ落ちた。それでも必死に泣くまいとして、ペチカの顔はぐちゃぐちゃになる。　（向山貴彦『童話物語』）

「～まいとして V」という形で使われると、「好ましくない事態が生じないように努力をする」という意味を表すことが多い。例(10)の「負けまいとして懸命に投げていた」は、「相手が投げる球に負ける」という好ましくない事態が生じないように、懸命に投げる練習をしたということを表している。同様に、例(11)の「地位を失うまいとして無暗に勉強した」は、「地位を失う」という好ましくない事態が生じないように、無暗に勉強したということを表している。

一方で、「～まいとして V」という表現は「好ましくない事態が生じないように努力した結果、悪い事態が生じる」という意味を表す場合がある。例(12)の「堀江正彦を失うまいとして、由美を殺した」は、「堀江正彦を失う」という好ましくない事態を避けるためにどうにかしようとして、他の人を殺すというより悪い事態が生じたことを表している。同様に、例(13)の「泣くまいとして、ペチカの顔はぐちゃぐちゃになる」は、「泣く」という悪い事態が生じないように努力した結果、「顔がぐちゃぐちゃになる」というより悪い事態が生じたことを表している。

また、「～まいとする」に後接する表現として次に多かったのが、「～まいとする N」である。「～まいとする」が修飾する名詞には、次の例(14)のような「責任感」、例(15)のような「配慮」、例(16)のような「意志」といった「人の気持ちや考え」を表す表現が多い。

(14) 自分の仕事が期限に遅れたり粗相をしたりすることで、顧客に、上司に、部内の他の人に、社内の他の部署の担当者に、迷惑をかけまいとする責任感に駆られて呻吟している自分の姿に気づく。　（大野正和『過労死・過労自殺の心理と職場』）

(15) 風見は少なからず驚いた。いままで紀久子が自室へ異性の社員を呼び寄せたことはなかったからである。女社長として、男の社員からなめられまいとする配慮か

らであろうが、それはそれなりに紀久子の権威を保つ効果をあげていた。
（森村誠一『新幹線殺人事件』）

(16) 一郎の手紙には、「節制」「忍耐」の言葉が頻繁に登場する。「一日中馨と一緒にいたい」「筆の運ぶままに手紙を書き綴っていたい」恋をすれば誰もが抱くこんな気持ちを抑え、薫が勉学の妨げになったと言われまいとする意志を、ここに読みとることができる。　（鳩山一郎『若き血の清く燃えて』）

3.3 「～まいとする」の使用分野について

最後に、「～まいとする」がどのような分野で多く使われているのかについて調べる。先行研究では、「～まいとする」は「書きことば的なかたい表現」（グループ・ジャマシイ（1998: 534））と指摘されている。

「～まいとする」がどのような分野で使用されているのかを「中納言」で調べると、圧倒的に書籍が多い。その他のものとして、ブログに４例、雑誌に１例、知恵袋に１例、新聞に１例用いられていた。次の例(17)はブログの例、例(18)は知恵袋の例、例(19)は新聞の例である。

(17) 忙しいところにメールが来た。N ちゃんからであった。「りゅうちゃんが熱を出して、吐き気もすると言って・・・・」娘と N ちゃんがわざわざ病院まで連れて行ったそうだ。娘と息子からはメールが無い。娘はこういう時、私に心配をかけまいとするようになった。　（Yahoo! ブログ）

(18) 仕事中、どんなに対策しても眠ってしまいます。前日にしっかり眠ってもコーヒーやドリンク剤を飲んで、眠るまいとしていても気がつけば意識が薄れ、船をこいでいます。　（Yahoo! 知恵袋）

(19) （前略）裁判中の報道について「原告の言葉を忠実に報じた。その結果、隠ぺいされていた隔離政策の実態が白日のもとにさらされ、世論を喚起した」と評価する。ただ、判決後の堰を切ったような大量の報道について「乗り遅れまいとして報道したマスコミもあったのでは」（後略）。　（中日新聞）

数は少ないが、「～まいとする」は例(17)や(18)のようにブログや知恵袋で用いられることもある。また、例(19)はある人の話を聞いて記事にしたものであることから、「～まいとする」は話しことばでも用いられているということができる。

４．まとめと今後の課題

否定の意志を表す「～まいとする」について、次のことを明らかにした。

・Ⅱ型（一段）動詞が「～まいとする」に前接する場合、「語幹＋まいとする」の形がよく用いられ、「非過去形+まいとする」はあまり用いられない。また、不規則変化動詞「する」が「～まいとする」に前接する場合、「すまいとする」という形がよく用いられる。

・「～まいとする」に後接する表現は、「～まいとして V」が最も多い。また、「～まいとして V」という形で使われると、「好ましくない事態が生じないように努力をする」という意味を表すことが多い。

・「～まいとする」は数は少ないが、ブログや知恵袋などでも用いられている。

今後の課題として、否定の意志を表す「～まい」についても調査し、「～まい」と「～まいとする」ではどのような違いがあるのかについて考察する必要がある。また、「～まいとする」の類義語である「～ないようにする」や「～ないでおこうとする」との意味の違いについても分析したいと考えている。

文　献

庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
グループ・ジャマシイ（編）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
友松悦子、宮本淳、和栗雅子（2010）『新装版　どんなときどう使う　日本語表現文型辞典』アルク
日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法④　第８部　モダリティ』くろしお出版
益岡隆志、田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版